

事例発表②「関西学院大学における ポートフォリオの取り組みについて」

豊 原 法 彦（関西学院大学高等教育推進センター長）

関西学院大学の豊原と申します。本日、このような機会を設けさせていただき本当にありがとうございます。関西学院大学でポートフォリオという新しい試みを進める中で、多くの大学より、いろいろ勉強させていただきました。この場をお借りしまして、まずお礼を申し上げます。ありがとうございました。

最初に関西学院大学の紹介をさせていただきます。「Mastery for Service」がスクールモットーで「奉仕への練達」と訳しますが、上智大学の方も大勢いらっしゃいますので、キリスト教をご存知の方は、「ローマの信徒への手紙」、その中で、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練達を生み出して、練達が希望を生み出すとありますが、その練達、それにあたる単語が「Mastery for Service」の中で奉仕への練達という形で言われています。今日はせっかくお越しいただきましたので、関西学院のことで「Mastery for Service」というキーワードでも、何か一つでも覚えていただきたら、私がここでお話をさせていただいた中身の目的の半分ぐらいは果たせたのではないかと思います。関西学院のことをもう少し紹介させていただきます。元々は神戸市内にありました。神戸、関西のことをご存じの方でしたら、現在は王子動物園という動物園がありますが、当時は原田の森と呼ばれていたところ、そこに1889年に創立しました。その後、大阪と神戸の間にある西宮の少し山手のほうになりますが、上ヶ原に1929年に移転しました。今年は創立130周年にあたります。現在では11学部14研究科、学生数約2万4,000人、専任教員数約600人、文系と理系の比率が若干ありますが、だいたいST比40の大学だと思っております。2011年度には文部科学省の「大学の世界展開事業」に採択され、カナダのアリソン大学と提携し、CCC（Cross-Cultural College）を展開させていただきました。

さらに2012年度には、「グローバル人材育成推進事業」、GGJと呼ばれていましたが、その中のタイプA、全学推進型に採択されました。実は、このところで学修型ポートフォリオを一旦つくりました。その後、今日お話しさせていただく、2014年度に採択されました「スーパーグローバル大学創成支援事業」、いわゆるSGUタイプBでポートフォリオを開発しました。本日はこれがベースになっています。2016年度には、「入学者選抜改革推進委託事業」に採択され、皆様方からすれば、JAPAN e-Portfolioのほうがわかりやすいかもしれませんが、そのプロジェクトもらせていただいています。





資料 1

1. スーパースーパーグローバル大学創成支援事業

「スーパースーパーグローバル大学創成支援事業」いわゆる SGU において、本学は「グローバルアカデミックポートの構築」を掲げて採択されました（資料 1）。その中には 5 つのキーワードがあり、1 番目のダブルチャレンジ制度には 3 つの方法を設けています。1 つ目は海外留学であり、要するに自国と外国を学ぶという意味での 2 つのダブルチャレンジ、2 つ目はハンズオンであり、大学の中へ留まるのと、社会に出て行くダブルチャレンジ、3 つ目は副専攻であり、自分の専門科目と他学部の専門科目を履修する、専門を 2 つ学ぶダブルチャレンジです。これら 3 つの方法どれかに学生がチャレンジできる環境をつくる、どれかを経験して卒業してもらいたい、それができることを保証しよう、質を保証しようというコンセプト、それを本学では教育 OS の刷新という形で提言しました。2 番目の留学の部分に関しては、派遣学生数のこと、3 番目のガバナンス改革による相互マネジメントの実現は、大学だけでは行えませんので、本学の場合、学長が制度的に副理事長という形、理事が自動的に副学長になるという形、そういう形のたすきがけとし、迅速で機能的な判断ができるような形にするというマネジメントです。ポートフォリオに関わるのは 3 番目と 4 番目のところですが、国際通用性のある質保証、特に質保証をどういう形で評価してもらえるようにするか、逆に学生が、どう自分たちが学び、学んでいることを実感できるようにするかという、そういう形の質保証のところが 3 番目のところ。5 番目は、国連や国際機関へのゲートウェイの創設ということで、大学院の中にサブプログラムをつくり、そこでの学びとしています。

2. 関西学院大学におけるポートフォリオ

ポートフォリオは、資料 2 の一番下の国際通用性のある質保証の構築の中の下のところにあります。ポートフォリオをつくることで、今までの実績、すなわち 2 年前からやっていたプロジェクトのものも踏まえた上で新しいものができるとよいということから出発しました。具体的に何をつくったのかという話ですが、資料 3 のとおりスマートフォンをベースにつくりました。



資料 2

関西学院におけるポートフォリオとは



資料 3

個々のボタンの機能は追々説明しますが、例えば技術的なことは別として、一つだけわかっていたことがあり、今さらパソコン向けでつくってもだめなこと、学生に使ってほしいシステムは、スマートフォン対応でなければだめだということが出発点でした。学生にとっては、振り返るためのシステムができるとよいこと、主体はあくまで学生というところです。そして、ポートフォリオ、結局、最終的にはまたここに帰ってくるのですが、関西学院大学でいろいろ学んだものがあつたとすれば、それをポートフォリオを見れば、ストックされていて、振り返ることができる、そのようなものを作ることができればよいと設計段階で思いました。

実は今日お越しいただいていて申し訳ないのですが、どのようなものを作ればいいのかよくわからなかったもので、いろいろな大学にお話を伺い勉強させていただきました。北は北海道から南は九州まで、ご協力くださった14大学の方、誠にありがとうございました。いただいた貴重な

ご意見の中で、2万4,000人規模の大学としてできることは何か、そして、こういうことはできるかできないかというところを考えて、やっと設計仕様書、RFPまで落とし込むことができました。

特にお話を伺った中で、二つ、私が個人的に学んだことがありました。ポートフォリオというシステムは、大学がつくるのですが、学生は多分、思いどおりに使ってくれない、使ってくれないものなのだとすることを、まずは理解しないといけないということです。大学はこういうつもりで作ったのに、学生には、ほぼそうは使ってもらえないということが、最初に私が学ばなければいけないと思ったことでした。

もう一つは、こういったシステムを作り、結局、学生が何のために使うのかというと、やはり学生に振り返ってもらうためです。しかし、学生が振り返る場面は、2回ほどしかないのではありません。1回目は就職活動のときに自分は今まで何を学んできたのだろうか、エントリーシートを書くときに振り返るのではない、2回目は卒業するときに自分は4年間で何を学んできたのだろうか、就職先に提出する書類を作成するときに振り返るのではない、そういうときに、記録しているものがどこかにまとまってあるとよいということです。まとめて申しますと、結局、学生が振り返るための材料を提供するとある種割り切れば、システムとしてはできると思います。どうしてもポートフォリオ、学びを、目的をつくって学んでいくというと、ああしなさい、こうしなさいと大学サイドまたはシステムサイドが何かアドバイスをしてしまいます。何かそういう手助けをするとつい思いがちですが、それよりはむしろ学生に自立的にやってもらう環境を定常的につくっておく、それが手元にあるということが重要なのではないのかと考えるに至りました。

3. ポートフォリオ導入検討体制

ご協力いただいた大学に教えていただいたことも踏まえて、体制をつくるとよいということになりました。この段階で、多分こういうことをされた方、大学関係の方にはおわかりいただけると思うのですが、実は聞くも涙、語るも涙の物語がありました。私が今所属している高等教育推進センターがオーナーになるわけですが、その中で、やはり留学と言う限りは、言語関係の人員が要る。そして、留学先のところ、学生が行ったり来たりするわけですから、そういうことをサポートする国際連携機構のスタッフも要る。そしてそれとは別に学生活動をサポートする学生活動支援機構のスタッフも要る。振り返りの場面というのは就職活動時、外側にどうしても向かっていくので、就職活動をサポートするキャリアセンターのスタッフも要る。当然、システムにかかわることですから、システム関係として情報環境機構のスタッフも要る。そういう形で発足時はブロック部分の体制になりました(資料4)。

その後、健康診断の結果を学生に知らせることを考えて保健館のスタッフを加え、さらに図書館へ入館する際には学生証を機械にかざして入るため、入館情報が記録されます。入館情報だけですが、今月は何回入館したか、そういう情報を学生に知らせることも考えて大学図書館のスタッフも加えました。保健館と大学図書館は後から加えたので、ブロックから外れているのですが、当初、5つのブロックからメンバーを集め、学生にデータを返していくという、そういう形から始めました。こういう形で始めていったわけなのですが、先ほど聞くも涙と申し上げたの



導入検討体制(プロジェクト・WG構成図)



資料 4

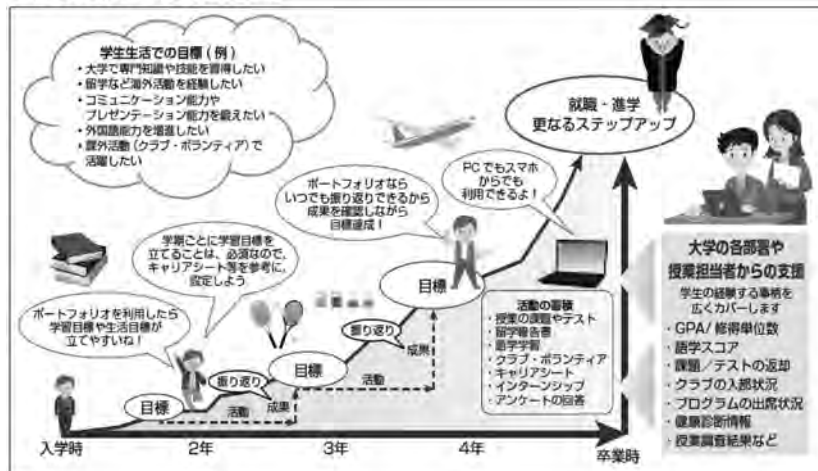
は、ポートフォリオをつくと手を挙げたものの、各部局より人員を派遣していただくにはまずポートフォリオとはどういうものであるかをご理解いただき、各部局にとっては固有の業務を抱えている中で、またいろいろなお考えのある中で追加的な負担をお願いすることになりますので、調整が難しいところでした。

4. ポートフォリオで目指したもの

本学が目指したポートフォリオはどのようなものかを簡単に説明しますと、各々が目標を立て、それに対して各自がアプローチしていき、完成度・達成度を自分で見ていく。そしてそれを踏まえてまた、次の目標を立てる。そういう流れです。しかし今の学生は目標を書いてくださいと言うと、今期は全部単位を修得するのが目標で、そのために全部授業を受けると書いたりします。全部の授業に出席するのは当たり前でしょうと思うのですが、それが目標だったりするのです。いや、そうではなくて、大学4年間の中で例えば留学しようと思ったときに、いきなり留学には行けないから、そのための準備として、このようなタイミングでこういう勉強をしよう、TOEICならTOEICで何点とるということを計画立ててやりましょうということです(資料5)。そのために、先ほどの場合でしたら、留学担当グループに加わってほしい、そしてデータを提供してほしい、アドバイスしてほしいという形で順番に口説いていくわけですが、ポートフォリオがそもそもどういうものなのかということを理解してもらうのに、結構時間がかかりました。当然、その部署の責任者からすると人員を割くわけですから、それなりの合理的な理由がないと、わかりましたと言ってももらえない。ポートフォリオとはどういうものなのか、そしてそれが自分のところの業務としてどのようにアサインされるのかというところをすごく言われました。ただ、理解してもらえたポイントの一つですが、いろいろなところにデータは存在していて、例えば、教務のデータでGPAは当然あるわけですし、学生はいろいろなところでテストを受け

ポータルフォリオ運用イメージ

＜ポートフォリオのイメージ図＞



資料 5

たりしていますし、クラブの所属情報であるとか、さまざまなプログラム、大学がいろいろ主催しているイベントへの出席情報、健康診断など、至るところで情報としてあります。これらを学生に戻すことで自分の振り返りのチャンスを与える。あくまでメインは学生に振り返るチャンスを持ってもらうことです。そのための情報をあなたの部署から提供してくださいと言うのは難しいので、一緒にアップロードしましょうとしました。例えば Excel で作ったファイルがあり、その内容を CSV 形式に変換し、それをアップロードします。それだけやっただけというのに結構時間がかかりました。先ほど来、繰り返しになりますが、例えば学生に自分が所属しているクラブの情報は入力なくていいこと、それは大学が把握しているから入力なくてよいという形で、学生が入りたい情報は学生が入力するけれど、大学が有している情報は大学が提供するという形の仕組みが要る。Excel のファイルなどデジタル情報などではできる限り、ポートフォリオにインポートすることにしました。

二つ目はスマートフォンの利用環境を意識して作ることです。本学ではLMSが当然ネット上で動いています。例えば教員がレポート課題を出す。LMS上に教員が課題の内容をアップロードして学生に知らせる。それを見て、例えばA君がLMS上にレポートをアップロードすれば、その情報、つまりあなたはアップロードしたという情報がポートフォリオ上に返される。アップロードしたという情報だけ、いわゆるタイムラインですが、そういうものをフィードバックするシステムもあります。それから、これが一番重要ですが、ポートフォリオは就職活動のときに多分使うだろうという想定があったので、1年生から順番にデータを逐次入れていかないといけない。ですので、2015年、2016年ぐらいから順番にシステム開発を行い、2017年から仮のカットオーバーということをしました。そのときに1年生だった学生が、今は2019年ですから、最初の学年がこれから3年生になって、まさに就職活動に向けて使い始めようかという段階ですが、蓄積には時間がかかります。システム自体は当然オープンですし、今4年生の学生も使えますが、蓄



実現しようとしたこと

- i. **学生は、必要なこと“だけ”を入力**
 - ☞ 大学側が持っている情報は自動的に入力し、学生は振り返りの入力に注力する。それだけでなく、「事務室のキャビネット等に保存しているだけの（死蔵している）情報を開示する！」
- ii. **学生にとっての利用動線を考慮**
 - ☞ スマートフォン利用はネイティブアプリを提供
PC利用については、多くの学生が日常的に利用しているLMSと一体表示できるよう工夫
- iii. **一足飛びに成果を求めない**
 - ☞ ポートフォリオはデータが蓄積されて意味を持つため、システム稼働した2017年度入学生から順次展開

資料 6



実現しようとしたこと

- iv. **“モノ”があると、みんな利用を考えてくれる**
 - ☞ 導入後、「ポートフォリオをこんなことに使いたい」という相談が増えている。
完成までは、紹介しても・・・
- v. **教員の利用を前提としない**
 - ☞ 学生の自主的な振り返りを期待
教員から導入に対する大きな反対はなかった
* 個人情報の管理への懸念などの声は上がった
- vi. **ポータルの代替**
 - ☞ 本学には全学ポータルとして稼働するものがないため、本来、ポートフォリオの役割でない機能もあわせ持たせた

資料 7

積された情報は当然ありません。もう一つ、便利ではありませんが、何年も経つ中で、3年、4年と経つ中で順番に使えていくようにしようと、いわゆる暫時的な形の設計にしようということが最初に出ていました。いきなり完成版でこれだからこうしようというよりは、むしろ、入れ物を先につくって、そして情報がたまっていきさえすれば、いいものであれば学生は使ってくれるのではないかという気持ちもありました。そここのところのコンセプトはどういうことかと申しますと、各学部の先生方に遡求するのは、なかなか難しいものがあります。いろいろな考えの先生方が多いものですから難しいのですが、簡単で便利なら使いたいという先生は結構多いので、そういう意味で、まず環境として整えていく。そして、完成した段階で先生方と一緒に考えようという、そういうスタンスをこの「iv」のところではとっていました（資料6、資料7）。

それが「v」に繋がるのですが、先生方からすると、最初に説明するときに何か得体の知れないものを使わせて、責任取れと言われても困るという、それは真っ当な判断だと思うのですが、そういうことを言われました。ですから、例えば学生が経済学がわからない、統計学がわからないという、先生方、またはスタッフが答えるのではなく、自分がどのように勉強をしたらいいのかを自分で考えてくださいと、あくまで学生の自主的なことを書いてもらおう。それに対して、自分でこうしたらわかった、自分で振り返りを書くことにしてもらおう。これは他の人には見られないです。自分で書いて、自分でこういう目的を達成したみたいな形でやっていってもらおう。そういう形を設計しました。当然、そうなってくると非常にパーソナルなものになりますので、個人情報をどこまで書くか、自分はこのようなことを目標にしていることを他の人に当然、声高に言う必要はありませんので、個人情報の管理は非常に厳しく設定しました。もちろんポートフォリオに幾つかのタイプがあって、いわゆるショーケース型という、こういうのをつくったから見てという形のポートフォリオも本来あり、それがあつた種の主流なのですが、本学の場合はそれよりはむしろ自分で振り返るための、自分で自分を考えていくためのものとしているという性質がありますので、情報管理のところは一層神経質になっていました。

最後のところでは、本学はいろいろなシステムを導入しています。教務システムもあれば、情報関係のインフラもあります。たくさんあるのですが、全体統制がされていない環境にあつて、本来そういうのをぐっと抑えるのがポータルなのですが、何かポータルをしようと言うと、話が消え、また話しが出てきても学長が代わるとまた消えみたいな形で、要るけれどもなかなかでき

ないという状況がありました。今回それがたまたまスマートフォンでポートフォリオをとという機会をいただいてつくったものですから、そのつもりはなかったのですが、逆にポータルとして、学生が手元にあるからすぐ使うという、本来のポータルでは全くないのですが、そういう形で使われていくという形になっていきます。後で説明しますが、この「vi」のところが少し痛い目に遭います。別に先ほどの上智大学様のような話ではないのですが、少し予想外な形に発展していく余地が残されていると思っています。

5. 関西学院大学のポートフォリオ

メニュー画面は、資料8のとおり9つの機能を縦に3つ横に3つ並べ、三三が九でタイムラインとし、こういうことをしたということがどんどん時系列的に流れていくという形にしています。言語設定は日本語と英語だけですが、選択できます。スマートフォンをぱっと開くと画面に出てくる。順番にこういう機能があるというところで、目標設定機能であるとか、学修状況であるとか、科目記録機能であるとか、課外活動であるとか、こういう順番に置いています。

本来、ポートフォリオらしいポートフォリオと言うと少し難しい言い方ですが、一番イメージしやすいのは目標に関すること、自分で目標を決める、それに対してアプローチを考える、どれだけ進捗できたかを考えて、期限が来るともう一回もとに帰るというような、そういうスパイラル、いわゆるPDCA みたいな形なのですが、そういう形の目標設定のものがありません。本来それでよかったのですが、本学では結局、それを振り返るときに関西学院大学の中のいろいろなところに散在しているデータを全部学生へ返してあげようというところで、完璧なものではないのですが、学修状況、個々の科目の成績が何点だったというデータはありませんが、GPA は幾つだとか、大ぐくりなデータを見られるのが「②」です。「③」のところは、どういう課題を提出したとか、イベントに参加したという記録のデータ、各部局がCSV 形式のファイルで上げたデータを本人に切り分けたものです。「④」のところにも入ってきています。「⑤」のところは先ほどと同じようなものですが、留学に行って、帰ってきて、レポートか何か当然、書きますが、



資料 8

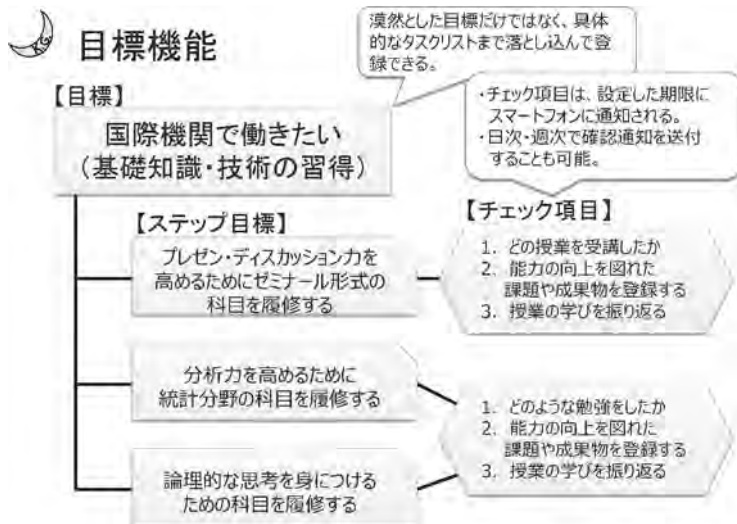
そういう成果報告書を国際連携機構に提出することになりますが、そのデータが回り回って自分のところに、こういうことを書いたというのが本人に返ってくるというフローを考えております。キャリア機能につきましては、従来から入学時に就職活動をするためのハンドブックを渡しております。そこでは1年生のときに自分自身はどんな人間に成長するのか、自分なりに考えてみようから始まって、自己紹介の際にはこのように言えるみたいなことを考えていこう、2年生になったら1年生の振り返りと、どういう業種を自分は考えているかなど、そういうことを考えていく。そういうステップアップ機能みたいなものがあるので、それをWeb化しましょう、Web化というかスマートフォンでもできるようにしましょうというのが、この「⑥」のところなんです。どうしても、冊子体だと無くしてしまうので、1年生のときに書いたけど、何処かでなくしてしまったみたいなことがあるので、それを残しましょうというところなんです。それから、先ほど来お話ししています「⑦」のところですが、保健館では年に1回健康診断を行い、以前は診断結果を紙で1枚ずつ配っていたのですが、それはなかなか難しいというところ、もちろん疾患のある学生は当然、すぐにコンタクトをとるのですが、そうではない学生に全員配らなければならない、どうしたら個人まで訴求できるのだろうと考えたときに、ポートフォリオに白羽の矢が立ったこともあり、ここに加えました。当然、これは個人情報の固まりですから、漏洩したら大変なことになりますので、とても厳密な構造で運営されています。また、申請などの提出機能、いろいろなことを学生が申請することがあるので、この機能を使います。それから「⑨」のところ、アンケート機能は、アンケートをしていく中で手元にスマートフォンがあると答えてくれるのではという思いでつくっていました。

また開発のタイミングでお話をすれば、ベースの開発はすでに述べましたように構想は2014年から始まりましたが、2016年から開発し始めたところ、健康診断の話は、後から入ってきて、そして2017年にやっと仮バージョンでカットオーバーできました。ところが、その直後に、イギリスでのコンサート会場の爆発物事件の際に、本学の学生がそこにいたようだがその情報がなかなか大学で把握できなかったと言う事案が発生しました。加えて、文部科学省からの要請への対応で、個人での留学や海外旅行といった情報などを大学が把握していない状態では困る、渡航時の連絡先等を把握する機能が要するというので、追加機能として開発することとなりました。学生には空港を出る前にスマホでささっと入力してもらいたいということを目指しました。さらには、ほぼ同時に違う部局から、合格者の定数管理、受験生、合格者を厳密に行う必要がある、そのために、入学辞退届の提出を求めたり、本学で採用している補欠合格制度の運用においてその中から何人かを補欠合格にすればいいかの判断材料を提供する機能を、今まさに日々受験生の皆さんに使ってもらっている機能ですが、これらの機能をカットオーバー直後に追加で対応しております。そして、運用2年目、今年度のところでは、ポートフォリオを1年生から利用始めた学年の学生が出てくる前に、つくってきたもの、入力してきた情報を、卒業するときに持っていけるように出力する機能を追加しています。それからキャリア支援、就職関係のところで、いわゆる、FAQと言われる、しばしば尋ねられる質問に対して、紙だとなかなか読んでくれないので、チャットボットで返してくれるシステムを開発しましたが、今時の学生の利用状況を考えるとパソコンではなくやはりスマートフォンで使えるようにした方がいいということで、そのインターフェイスの機能も持たせています。そして、入学手続では入学金の納入とはまた別にさまざまな

初期設計後の機能追加内容

2016年度 (開発中)	2017年度	2018年度
・健康診断結果の表示	・スマートフォンの通知によるお知らせ ・目標のテンプレート	・蓄積データの出力(エクスポート)
開発中から機能追加の要望に対応	・海外渡航時の連絡先登録 ・アンケート機能の拡張(申請・申込対応)	・キャリア支援チャットボット連携
	入手試験合格者向け機能	
	・専用アプリの開発 ・入金等手続進捗確認 ・辞退届提出	・入学手続き書類提出

資料 9

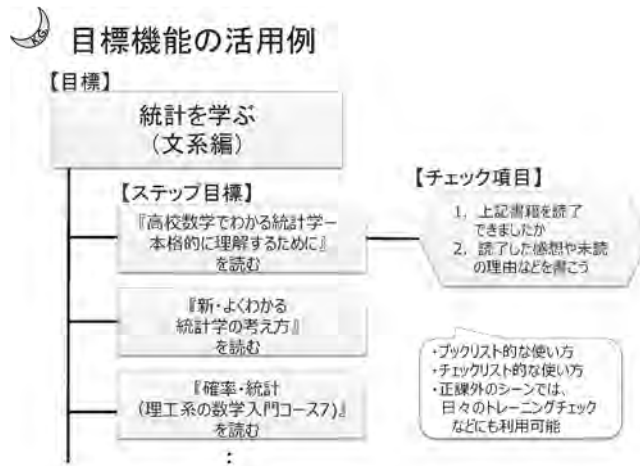


資料10

手続、書類を提出する必要がありますが、それも Web 上というか、スマートフォン上のできる構造体として開発しています。本来でしたら、資料9のメッシュよりも上のところだけでよかったのですが、学生、または受験生に訴求できる環境が構築されたので、いろいろなものが後づけで開発できる環境になってきているということです。

開発と並行して、学生の使い勝手のことを各部局と相談している際に、自己目標を書く際のひな形があれば、イメージしやすいのではないかと指摘を受けました。例えば国際機関で働きたいという学生のために、それらの学生たち用にとりあえざるゴールはここに設定しましょう。この各々のゴールに対してこういうことをすればいいという、何というか、セミオーダーという形の目標設定の場所をつくっています (資料10)。

教員からすれば、1回目の授業でリーディングリストを説明したりなど、入学直後のオリエンテーションの際に学生にこういう本を読むといい、こういう勉強をするといいとアドバイスの

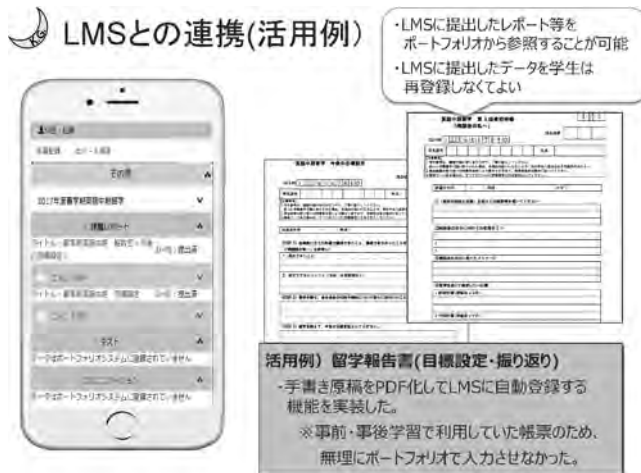


資料11

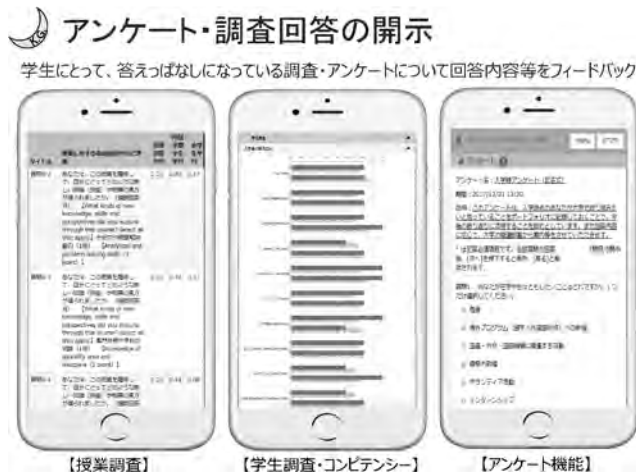
言うことがありますが、そのイメージです。ですから、国際機関で働くことを目標としていて、英語だけ勉強していればいいのか。いやそうではない、やはり統計も要る、論理的な思考、ロジカルシンキングも当然、要る。だから英語だけではだめだということをまずは理解させることが、このときには必要だということを担当の教員から聞いて、こういうものをつくりました。また逆に、統計、私のところからつくったのですが、統計学を文系の学生で学びたい場合に、これは授業の最初に言うことですが、こんな本を読んだらいいという、リーディングリストを読んで、それで大体こんな感じということを自分でチェックリストをつくって、読んだ読まなかった、読んでどう思った、ここがわかりにくかったというのを、自分なりの、いわゆる昔で言う読書ノート、そういう形のものをつくっていってもらうということが重要なのではないかとこのところで、いわゆるセミオーダーのような形で、こういうものをつくってみたということです（資料11）。

LMS とのかかわりということで言うと、学生は、レポートを当然、Wordなどで作成した電子ファイルで提出するわけですが、コピペを防ぎたい、数式やグラフを書かせたい、などのニーズが少なからずあります。授業支援ボックスというシステムなのですが、学生が手書きで所定の欄に、学生番号を、そこそこ丁寧に普通の文字でさえ書いてくれば、それをPDF化してLMS上にインポートできるシステムを導入しています。先ほどお話しさせていただいたようにLMSと連携していますので、留学の帰路に手書きで報告書を書かせる、書いてもらえれば、いちいち入力しなくても、事務方がスキャナーで取り込むだけで、それが回り回ってポートフォリオに記録されるという運用もしています。（資料12）。

授業評価のアンケートであるとか、学生調査、本学はこれまでマークシートで、抽出された者に対して学生調査を行っていました。それをスマートフォンで書いてもらおうということなんです。それ以外にも単発的なアンケート、各部署で作成できるように、アンケート調査をスマートフォンで投げかけることもやっています。ただ、どうしてもWebでのアンケートは、いきなり回答してと言っても答えてくれない場合も多いので、回収率については何か工夫が必要だということもありますが、ただ、当然、デジタルで入ってきますので、加工とかその後のプロセスを考え



資料12



資料13

ると、すごく便利になってきたと考えています (資料13)。

入学前に英語のクラス編成のための試験としてGTECという試験を受けてもらいますが、その得点は何点であったのかを紙で返さずに Web 上で返すとか、大学で受験した TOEIC の点数や、留学先の情報、図書館にこれだけ入ったという情報など、各部局にいろいろ CSV 形式のファイルでインポートしてもらった情報を、学生に見てもらえるようにしています。学生がこれらの情報をみて、振り返り、今月はこれだけ頑張ったということがわかるようにしています。他には体を鍛えることに励んでいる学生もいますので、トレーニングセンターの入館情報もあります (資料14)。

キャリア支援として、キャリアシート、ライフラインチャート、強みチェックシート、入学段階のときに関西学院として就職活動を見据えてというわけではないのですが、大学として学生に4年間をどう過ごすかということを考えてもらう、そういう冊子を配っています。その冊子にあたる内容をデジタル的に入力できるようなものをつくっています。ですから、1年生のときに自

大学が保持している情報の開示

図書館の入館情報や留学履歴、TOEICスコアなど各部署で登録。自己登録も可能。



資料14

キャリア支援

入学時に配付していたキャリア支援の冊子に書き込みをさせていた内容の一部を機能として実装



資料15

分はこう答えていたと、2年生になってそれをまた振り返って、こういうように思っているみたいなどころをレビューすることができるという、そういうものもつくっています（資料15）。

ここから先は、概括的な話になりますが、目標設定などキャリアシートにいろいろなメッセージを書いてもらいます。それをデータマイニングの手法で分析しようというのですが、専門の先生と話をしていて、どんな単語がどれほど出てきたのかというのを大きさで見たいと思います。資料16の上のところでは自己目標については、知識だとか国際機関だとかそういうところが言葉として多く出てきていた、勉強するということもたくさん出てきているとわかりますし、下のところでは2018年度の挑戦したいことは何ですかというのを書いてもらったら、留学したい、ボランティアで頑張っていきたいということがやはりよく出てきているというのが見てとれると思います。

これまでメニューで見ていただいたところですが、ここから先はプロファイル的に見ていただ

🌙 目標設定・キャリアシートへの記入内容



資料16

🌙 ポートフォリオを用いた学生支援の在り方



資料17

ければと思います。2万4,000人の学生がいて、ざっくり4で割ったら6,000人ぐらいが1学年の学生数です。そうすると、2017年の4月、先ほど仮カットオーバーと言っていたのですが、そのときには大体6,000人、1年生は全員アプリをインストールしてくれました。もう少し正直に言う
 と、1年生全員を集めて、はい、ダウンロードしてとやらせたのですが、そういう形でこれだけ
 が入ってくる。当然、2018年4月、去年の4月もダウンロードはとりあえずしてくれています。
 では、利用端末はどれ程の割合なのか、iPhone がやはりすごく多く6割強の65%、アンドロイ
 ドは12%ほど。要するに、スマートフォンで大体77%。先ほど正確に申し上げなかったのです
 が、実はパソコンでも操作することができます。ですから、パソコンで操作する学生もいるわけ
 ですが、まあ、スマートフォンレベルで77%の学生に使ってもらっているという状況です。やは
 り学生がスマートフォンを使うようになってきており、先ほどの相生様がおっしゃられたとおり
 だと思っています。

このようにスマートフォンで使い出してきて、いろいろなことが環境的に整ってきたわけですが、各フェーズでどう使うのかということをはばらばと見ていただこうというのが次のところ（資料17）。

入学前の段階としては入学手続で入学予定者に使ってもらえるようにしています。そして、1年生、入学したときに新しい目標として、4年間大学でどうやって学んでいくかということ、そしてクラブであるとか、いろいろなところで学びがある、目標の入力を1年生にしてもらう。アンケートなどもあり、2年生、3年生となって、上のエントリーシートの作成、就職活動のところで、やっと学生は気づいて、これを使うようになるようです。そのところで、やはりこういうところにエントリーシートで書くときにこういうように、リソースとして使えるようになってきていて、最後、卒業段階のところでそれに対してどう、出力するかというのが今説明したところです。学生にメインに使ってもらうという面ではこれでいいのですが、教職員、我々のほうがどうそれに対してどうアプローチしたらいいのか、または、使ってもらうための促しとしてどうしたらいいのかというのが次のところで出てくる。これが記入への働きかけということになります。放っておいて書いてくれるかということ、当然そんなことはありません。我々もあるシステムを渡されて、4月1日に今年度の目標を書きましょうと言われてもなかなか書けないですから、そのところをどう働きかけるかというところが一つ大きな問題になってきます。

その一つのソリューションとして、ゼミの専攻でポートフォリオの中の自己目標などを選考の際に活用するというのを先生にはあらかじめ宣言していただき、そのゼミを志望する学生には、自身でこれまでを振り返った上で、ゼミに対する志望動機を書いてもらう、という試みも行っています。エントリーシートを書く、学生に当然書いてもらうわけですが、そのときのサポート、支援という形で使うこともあるでしょうし、授業の中で振り返ることが重要というような働きかけの必要性も当然出てくると考えています。学びそのものは学生に主体的にやってもらうためのものであって、例えば、これをやったから何単位得られるとかそういう類のものではなく、ただ、振り返りのための環境整備、状況のサポートというところができるといいと思っています。

先ほど見ていただいた最後の部分ですが、ポートフォリオを真面目に使った学生を想定した形ですが、一生懸命データを入れるわけです。そして、卒業後には大学のIDが利用できなくなったから、はい、さようならというのは当然あり得ないことなので、現在開発中ですが、データをアウトプットできるようにしようと考えています（資料18）。当然、ここまでデジタル化しているのに、何か印刷して分厚い紙で渡しても、それは違うだろうとも考えています。今開発中のところではあるのですが、こういう形で、学期の目標であるとか、自己目標であるとか、それをフィールドごとにまとめたものをHTMLの形かなにかで示すことができればいいということろです。

正確に言うとシステム側がネット上にアップロードしたものをユーザにダウンロードしてもらうのですが、多分、個人用にあなたはこのように各学期にこういうことを書きました、単位目標としてこういうことを書いていて、こういうステップ、こういうプロセスで自分を選び、書いていて、それに対して、バリエーションはこうだったという形のものを、これも書いてもらうわけですが、HTMLファイルに書き出したものを各個人にお渡しする、エクスポートができるような環境を想定しています。先ほど見ていただいたのが学期目標で、その下に自己目標という形で順番に、フィールドごとにつくっていった、アウトプットします。当然、システムにログインしなければならず、卒業するとエクスポートは難しくなりますが、こういう形でアウトプットをつ



資料18

くっております。学生が個々に入力したデータ以外にもいろいろな部局がアップロードしたデータも再生可能です。ポートフォリオに入力してもらったデータは、学生個々人によって最も重要なデータ、財産ですので、鋭意開発を進めているところです。ポートフォリオは2017年にカットオーバーしたシステムですから、2021年3月に卒業する学生が使えるようにという目標で開発を進めています。実際には、今年の卒業生はもちろん、在学生も利用することができるようになります。テスト的な対象にはなるのですが、ベースとして運用しております。このように必要な機能を、そのときのニーズに随時合わせるように、機能開発し、暫時投入の形をとっています。

6. まとめ

まとめさせていただきますと、こういうポートフォリオをつくっていく中で、結局、最初に申しましたように、学生が使う、そのことのみをベースに考えてきました。そのときに、学生からすれば、知らないうちにデータがたまっていて、ここさえ見れば各種のデータがあるというところが一つ目指したところです。それから、もう一つのところとしては、つくり込み過ぎないこと。実はこういうのを設計していく中で、個々の部局なり個々の先生からこういうことをしたいと、すごく強い熱意をお持ちで、そのところにリソースを注入し過ぎると、次のバージョンアップの際になかなか難しいとか、つくりかえるのは工数がかかることが経験的に分かってきております。システム開発の際に、体に服を合わせるのか、服を体に合わせるのかみたいな話がありますが、そういう意味ではこのシステムは服に体を合わせてもらいましょうと考えていました。

何を申し上げているのかというと、学生に対して強くサポートしてあげたいと思っている教員もいるのです。もちろんその方は教育的側面からいろいろな情報を見たいと言われるのですが、その先生に権限を与えるということは、結局、全教員に権限を与えるか、細かく属性の設定を行うかのいずれかということになってしまいますし、後者の場合には多くのルールを作ることにな

りますし、前者の場合には個人情報の固まりみたいところがあるポートフォリオでは、望ましくないと考えられます。せっかくやろうと思ったのにと、ゼミ生だけは見たいとか、いろいろなご意見をいただいたのですが、とりあえずそれらは今後の課題とさせていただきます。イメージ的には読み書きの権限の属性を多くつくれば可能な話ですが、それはしないという単純なつくり、そういうところのつくり込みはしないようにしましょうというのが大きなところだだと思います。特に全学ポータルとか全学的にこういうものを作って、全学揃ってとなると、本学ですと、理工学部もありますし、経済学部、神学部と考え方もさまざまですので、全学的に使っていくような、まずは、ポートフォリオをポータル風に暫時的に利用するのは仕方ないと考えています。けれども、将来的にはそれは余り正しいことではないと思っています。逆に言うと、これが契機となって、やはりこういうのも要ると、では、それはもう少し全学体制で構築していこうというように、話が転がりはじめるのではないかと、実際に今、ようやく動きつつあるということです。

そして、実際に学生にどれだけ使ってもらえるかというところが中心です。設計の段階でも言っていたのですが、つくっている人、プロジェクトチームに入っている人は、みんな30代、40代です。還暦近い人までうろうろしているわけですから、その意思決定でつくると、多分間違えます。10年前、ガラケーのときにスマートフォンを想像できなかったのと同じ、相生様もおっしゃっておられたように、そここのところの意思決定は結構難しい。学生が書き込みやすいものをつくるということを考えたときに、どのようにするのか、そのためのゴールは何なのか、そしてそのために、使ってもらえるための環境をどのようにつくっていくのかということをしかり考えないとだめだということです。それが大学だとどうしても単位を出すことに結びつけがちです。ただ、単位を出すとなると、ご承知のように設置基準にある45時間の学修が必要という、そっちのロジックになってしまいます。今後はそうではない形、つまり課外とか授業とは違う形態も学生にとっては、どちらも大事なプロセスになってきます。多少違う面はあるかもしれませんが、そういうことを自分たちからアクティブに学び、そして自分で自分を評価する、その中で自分自身が学んでいくことが目指されています。実をいうと、JAPAN e-Portfolio も同じコンセプトで来ていますし、そこで学んできたものを、書いたものとして当然データとして本学のポートフォリオにインポートできるとは思いますが、データのインポートレベルでなくてコンセプトそのものをこちらに引き継いでくる。そして、学びのプロセスを自分で設計して次に学んでいくという形で、いわゆる、文部科学省のESD、Education for Sustainable Development、そういう形で学んでいくというストーリーの一部として、これを使ってもらえたらと考えています。

ただ、私自身もそうですし、もしかしたら皆様方もそうかもしれませんが、余りこういうシステムに沿って勉強してきたことがないので、自分たちが使ったことがないものですから、いろいろさわりながら学んでいる最中です。ですから、ある程度フレキシブルで、そしてうまく学んでいける環境をつくっていかないとはいけませんし、今後、つくり続ける中で、ポータルの中の一部としてポートフォリオが入ってきて、そしてそれが学びの延長、学びを深めていく道具として学生に使ってもらえることが重要だと思っています。

ご清聴ありがとうございました。